２０２３年7月１６日　Ｎｏ.３６７６

先週の講壇から　　〝生きているの？〟

ローマの信徒への手紙 第12章1節～8節

聖句「自分を過大に評価してはなりません。むしろ、神が各自に分け与えてくださった信仰の度合いに応じて慎み深く評価すべきです。」(12:3)

１．《小さな幸せ》　何にでも「プチ」という冠詞を付けるのが定着して早や何十年です。「プチ」が付くと「それくらいなら、まっ、いいか」みたいに感じるのです。♪「大きいことはいいことだ」と謳われた高度経済成長期、「イケイケドンドン」のバブル期を経て、小さいものに目を留め、カワイイものを愛でる日本人の別の面が表に現われたように思います。チッポケなことは素敵なことです。空疎な巨大建造物よりも、個々人の身の丈に合った幸せがあるのです。

２．《小さいこと》　北海教区の宣教会議の席上、「最近の教会には、財力のある壮年の男性が少ない。宣教の方策に加えよ」と発言した牧師がいました。「社会の矛盾に直面して、一番苦労している壮年男性を」と言うなら分かりますが、単に「財力のある人（金持ち）を自分たちの教会に取り込みたい」という意見は、余りにも慎みが無い、志が低いと感じました。福音を愚弄していると思いました。パウロも小さい事を大切にと訴えています。私たちは「体の一部」に過ぎないのです。私などは爪の垢かも知れません。私自身はチッポケな存在なのです。しかし、そんな私も「キリストの体」に結ばれているのです。ですから、体のどこかが痛めば、私も痛いのです。そこが個人主義との大きな違いです。

３．《生ける生贄》　個人主義的な信仰は、自分が救われるかどうかしか考えようとしません。自分が幸せになるかどうかしか考えません。それだけを説いている教会は、どれだけ大規模であろうと、福音を矮小化しているのです。「キリストの体」「神の民」である教会は個人主義的ではなく、共同体的です。キリストは個人に対して語り掛けません。共同体に対して語り掛けます。礼拝に集えば、私たちは互いの消息を尋ね合い、教会は他の教会の消息を尋ねます。苦しんでいる人がいると知れば祈り、子どもたちの将来を祈り、社会や平和のために祈ります。キリストに繋がって泣いたり笑ったりすること、これが「生きていること」です。

朝日研一朗牧師